

遠い旅

三浦朱門

650円

昭和47年4月15日 印刷

昭和47年4月25日 発行

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

印刷所 中央精版印刷

製本所 大口製本

発行所 毎日新聞社

●100 東京都千代田区一ツ橋

●530 大阪市北区堂島上

●802 北九州市小倉区紺屋町

●450 名古屋市中村区堀内町

© SHUMON MIURA printed in Japan 1972

0093-400052-7904

遠い旅
三浦朱門

毎日新聞社

目次

白 い 鳩	黒 い 椅子	醜 い 白鳥	水 の 中	改 築	古 巢	遠 い 旅
219	155	123	103	77	49	5

遠
い
旅

一

E市はまるで見知らぬ町のようにであった。彼がE市の高校を出て東京の大学に行ってから、二十三年になる。その間、E市は空襲で焼け、地震でくずれ、経済高度成長とかやらで、ビルが次々に建った。そして彼はその間、一度もE市に來たことはなかった。

そもそも、今、彼が背にしている駅舎からして見覚えのないものであった。ただ、目の前に真直ぐのびている通りの広さと、その中央に光っている市電の線路の延長が、遠い山脈の一番低いあたりにつくづく位置関係だけがかすかに彼の記憶に合致しそうな気がした。

「どこなの、その宿屋は？」

苑子が彼の肩の後ろから声をだした。

「いや、お城はあのあたりにあるんだがね。」

彼は答にならないことをつぶやくと、タクシー乗場の方へトランクを持って歩いていった。ここに彼の昔の生活の痕跡こんせきを見つけることを諦めようとしたのだ。

はじめてこの町に來た時、彼は駅のブリッジの窓から、まだ薄青い空と夕焼け雲を見た。その赤い空の下に、半ばシルエットのように、白壁と黒い瓦の天守閣を認めた時、この町をなつかしく思った。城、武家屋敷、城下町、郊外の古い寺、そういうものに、彼はロマンチズムを刺激されて、もしこの高校に入学したら、日曜にはそういう場所を歩いて見ようと決心した。

そして受験準備に読んだハーンの記事を思いだしながら、東京にはもう見られなくなった古い日本の中にわけいってゆくような新鮮な感動をおぼえた。

そのころ市電の通りをそれると、水量の豊かな水路が道端にあり、その向うに並ぶ家は、一軒ごとに、小さな洗い場があり細い橋がかかっていた。水路にはまだ薄青い空と夕焼け雲が映っており、その像を小波と家鴨がかき乱していた。

「城陽館というのは、昔からある宿屋でね。城の南にあるからだそうな……。」

「旦那も高校の五十周年でこられたんですか。」

タクシーの運転手が声をかけてきた。

「新制になる前の旧制の高校生はここじゃ、よかったそうですね。」

「君はE市の出身？」

「いや、東京ですよ。くいつめましたね。女房の実家がここですから、都落ちして、ここでタクシーの運ちゃんですわ。」

「ぼくもね、中学の成績が悪かったもので、ここまで都落ちしたのだが……。」

城陽館という名前は記憶があったが、建物ばかりでなく、場所もちがっていた。女中に、

「もと、これは水門町にあったんじゃないか。」
ときいても、

「さあ、あたしは五年前から勤めてますけれど、ずっとここでした。」

女中は宿屋やE市の過去について、何の関心もなさそうだった。

「あ、そうだ。もう一部屋、都合してもらえないかな。」

苑子のために、一部屋とらなければならなかった。

「それはだめです。五十周年で市内どころか、水晶洞あたりの宿屋まで、満員なんです。」

水晶洞というのは、E市からバスで一時間ほどの鍾乳洞で、そのまわりに三業地などもあり、昔からE市の男たちの息抜きの場所であった。

「お客さんのお連れがまだほかにあるんでろか。」

「いや、そうじゃないんだが。」

「だったら、御夫婦で一部屋あれば充分じゃありませんか。」

彼は苑子とは夫婦ではない。いや、それどころか、手を握ったこともない。

「ええ、一部屋で結構よ。」

そう答えたのは苑子だった。苑子がそう言う以上、彼がもう一部屋を要求する必要はないのだ
った。

三階の部屋からは樹木の茂った城山と天守閣が見えた。しかしそれは天守の足許の白いビル街
と較べると、あまりにも小さく貧相で若く逞しい労務者にまじった老職人のように、目をおおい

たいほどもじめだった。

「あたしね、この間、日比谷でうかがいたいことがあるといつて、ステーキを御馳走になったでしょう。あの時、本当にうかがいたかったのは、彼が愛せなくなった、なんてことじゃなくて……。彼から性病をうつされたんです。」

苑子は最近、縁談がまとまって、新聞社をやめた二十七歳の元社員だった。会社をやめて半月ほどしたら、元の上司だった彼に苑子から電話があった。男性というものについて、わからなくなったから、教えてほしい、というのだった。上司とはいっても、彼は苑子と個人的な話などしたことがなかった。また、彼女から思いをよせられている、という意識も全くなかったから、安心して社の近くでお茶を飲んだ。

「坂野さん、くさってるみたい。」

苑子は自分のことを言わずに、彼のことを言いだした。彼は新聞の芸能部の記者だった。今度の異動でデスクになると思ったのに、入社六年目の女の子——苑子——とラジオ・テレビの番組表を作る仕事を割りあてられた。職制から言うと、デスクと同列ではあるが、本来、これは病氣あがりの記者が一人でやる仕事である。苑子がやめてからは、今年入社した娘がかわりにやってきた。

「ああ、くさってるよ。」

「テレビ批評であんまり悪口書くからよ。」

「しゃくだから、明後日から高校の五十周年記念を見にE市へ行こうと思うんだ。」

彼は勤めて二十年になる。勤続二十年になると、記念品と慰勞金と、特別に十日の休暇が与えられることになっていた。もともと記者仲間では、「あと停年まで十年だから、今のうちから身のふり方を考えておけ」という意味で、退職金まがいの金と、退職後の退屈な毎日のおいを、ちょっぴりかがせるのだ、と言いついてはいたが、いざ自分の番になると、彼は一年も前から、それを当てにしていた。

慰勞金は二十万円あった。十日の休みは、妻とE市に行こうと思った。庶務から、勤続二十年の休みをいつとるか、と聞いてきた時、丁度、机の上にE高創立五十周年記念祝典の通知が来ていた。だから彼は休暇をその祝典に夫婦で参加する、ということにしてしまったのである。

出身高校がなつかしいのではない。青春の思い出に涙ぐみながら、放歌高吟するような単純な人間ではないつもりだった。ただ、年が明けて、早々に休暇をとろうとすると、冬の寒いうち、ということになる。E市は南国で温かいし、祝典などはともかくとして、E市の近くにある漁港などで、新鮮な魚をたべて、ゆっくり日向ぼっこをしてもいいと思った。客室が三間くらいしかない小さな田舎の宿で、冬の朝日を浴びて、海を見ながら鰯あじのたたきと味噌汁で飯をくうのも悪くない。そして妻の淑子と、来し方、行く末を語りたいと思った。もともと、そんなことを思ったについては、社内異動で、穴倉のような所におしこめられたから、という気持があった。

それなり、休暇のことは、忘れるともなく忘れていた。あと二週間というところに、帰宅したら、同窓会から連絡の手紙が来ていた。改めて淑子に旅に出ないか、とたずねたら、にべなく断わられてしまった。

「この三月がどういう月か、お忘れになったんですか。竜夫の高校の入試、真理の中学入試ですよ。」

それは知っていた。だから慰労金の半額と暮のボーナスの大半を、そのための費用にとっておいたのだ。しかし、子供たちだって、親に十日くらいの休暇はくれるだろうと思った。彼らだって、親のことは忘れて、羽をのばしたい時もあるだろう。

しかし淑子は行かなかった。行くなら、彼一人で行け、という。母親というものは入試を目前にひかえた子供たちを放置して、旅行などに行かないものであるらしい。

苑子は彼が一人でE市に行くことに同情した。

「とにかく、交通費も宿泊費も、全部、二人分、払ってしまつてあるんだ。」

「アラ、勿体ない。じゃ、あたし行こうかな。」

「そりゃいいけれど……。」

婚約者や世間体をどうするつもりだ、と言いかけて、彼は口ごもった。こういうのを世間でよく言う幸運というヤツかもしれない。幸運には前髪しなくて、後ろ髪がないのだから、やってきた時に、素早くつかまえばならないと、中学の英語の時間に習った。

「むこうに行きや、宿屋の部屋くらい、何とかなるだろう。」

彼はそう言いながら、自分が逃げ腰になって、言わなくてもいいことを口にしていて、我ながら愛想のつきる思いだった。苑子は黙ってうなずいただけだった。彼女は男心について、彼に教えてもらいたい、などと言ったくせに、それからは旅行のことばかり話題にしたがった。

そして、その翌々日、飛行機で東京を出発し、途中、汽車に乗りかえて、今、こうしてE市についた。宿屋の丹前に着かえても、彼はすこしも落ちつかなかった。五十周年祝典というのも、苑子という他の青年と婚約している娘と、こうして夫婦になって宿屋にいることも、不安なのだった。

二

「彼に性病をうつされたんです。」

「フーン。」

「だから、お風呂は、先におはいりになって。風眼ふうがんというのは恐ろしいんですってね。」

苑子は他人のことにように言った。恐らく、自分が性病になった、ということに実感を持てないのだろう。あるいは、彼と同じ部屋に寝ても、性的には一線を画すという意志を、性病ということで示したのかもしれないかった。

「彼があんまり言うから、許したんです。あたしだって、彼が最初の男、という訳じゃないから、そんな堅いことを言うのも気がきかないと思って……。」

「フーン。」

「病気を診てもらうことが恥ずかしい、といっても、お産をする時はどっち道、そうなんだから……。でも、自分にあてたラブレターだと思って読んでたら、宛名がちがう女だった、というのと似たショックだったわ。」

女中が貴重品入れと宿帳を持ってきた。彼はそこに坂野伴男、四十二歳、妻苑子、三十歳。と書いた。苑子は彼がペンを動かしているのを、茶を飲みながら、平然と眺めていた。彼の方が上ってしまい、

「たしか、三十だったね。」

と聞かなくてもいいことをたずねた。

女中と入れかわりに、旧制高校の制帽をかぶった六十近い男が、青年をつれてやってきた。もつとも服は普通の背広である。記念祝典の委員であることは、帽子を見ただけでわかった。

「七回生の楠瀬です。E交通の社長をします。E交通いうのはあんた、昔の高校バスですらあ。」

高校バスというのは、高校前から市の盛り場をぬけて、港まで行くバスの通称だった。二十三年前、彼はそのバスガールの一人を美しいと思った。浅黒い肌に口紅だけで化粧した健康そうな娘だった。彼女を美人だと思わないか、と友人に口をすべらせたために、それ以来、彼女のバスに乗りあわせる度に、友人たちは奇声を発して、彼をこずき、彼にバス代を払わせた。そして彼女もついに、高校生たちは彼がいる時に、何故、そんなにさわぐのか理由をのみこんだようだった。彼と視線が会うと、娘はビクツと目を伏せたし、浅黒い肌はスポーツをした後のように、赤らんでくるのだった。

ある日、彼が学校をさぼって、映画を見に行こうとして、バスに乗ったら、車掌がその娘で客

は彼一人だった。娘は最後部にいる彼には背を向けて、切符を切りになかった。バスはそこが始発だから、五六分の間は発車しない。何人か客が乗って来て、娘は彼らの切符は切ったのに、彼の所へはこなかった。

発車したバスは盛り場に近づくとも満員になる。娘はほかの客の切符は切っても、彼には目もくれないのだ。五十銭札を鼻先につき出しても、彼女はほかの客の相手をし、また、停留所に近づくために、いそいで扉の所へ戻ってしまう。

彼は盛り場でおりそこなった。おり際にバス代を払えばいい訳だが、彼女の態度に、何か自然なものを感じて、バスをおりる気にならなかったのだ。港に近づくにつれて、客の数はへり、最後の二三分間は、また、客は彼一人になってしまった。そして娘は強情なまでに彼に背を向けて、まるで彼の存在が目にはいらぬかのようなようだった。

終点に着くと、運転手は車をとめるなり、タバコに火をつけて、波止場の脇の待合室にとびこんだ。坂野はステップをおりながら、五十銭札を出したが、娘は受けとろうとしなかった。顔のぞきこむと、上気して、汗ばんだ顔をしていた。彼は自分の顔もきつとこんなに汗で光っているにちがいないと思った。

二人は五十銭札を間にして、しばらく睨みあっていた。今、何か言うべきだ、と彼は思った。「今晚、映画見に行かないか」「仕事は何時に終る？」

しかし彼は何とも言わなかった。言えなかった。娘が金を受けとらないのは、彼と彼の仲間がさわぎたててことに腹を立てて、そんな人間を無視してやる、という意志表示かもしれない、と